

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02262

研究課題名（和文）当事者参加型調査による親亡き後の支援の検討に関する研究

研究課題名（英文）A study on examining support after the death of parents through a participatory research

研究代表者

森地 徹（Morichi, Toru）

筑波大学・人間系・助教

研究者番号：50439022

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：参加型アクションリサーチにより知的障害のある人の親亡き後に必要となる支援要素を検討するために、親亡き後の問題に直面している知的障害のある人の協力を得て調査項目を作成しインタビュー調査を実施した。その結果、これから親亡き後の問題に直面する、あるいは既に直面している知的障害のある人合計で72名から親亡き後の問題に関する回答を得ることができた。その上で、調査結果は逐語録を作成した後、MAXQDA2022により質的に分析をし、親が亡くなる前については、「お金の管理」など13のカテゴリーを生成することができた。また、親がなくなった後については、「お金のこと」など7のカテゴリーを生成することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで知的障害のある人自身の視点から検証されてこなかった知的障害のある人の親亡き後の支援について必要となる支援要素を明らかにすることができた。また、そのような支援要素を踏まえた上で、これから親亡き後の問題に直面する知的障害のある人に向けて親亡き後の支援において必要となる情報を記入するためのノートを作成し、そのノートを知的障害のある人とその親からなる全国組織である全国手をつなぐ育成会連合会を通して全国の知的障害のある人とその親に対して配布し、あわせて全国手をつなぐ育成会連合会の全国大会において知的障害のある人向けにこのノートの使い方についてのワークショップを知的障害のある人の協力を得て行った。

研究成果の概要（英文）：In order to examine the elements of support needed by persons with intellectual disabilities after the death of a parent through participatory action research, a interview survey item was developed and conducted with the cooperation of persons with intellectual disabilities who are facing problems after the death of a parent. As a result, a total of 72 persons with intellectual disabilities who are facing or have already faced problems after the death of a parent were able to provide answers on post-parental problems. The survey results were then analyzed qualitatively by MAXQDA 2022 after a verbatim record was made, and 13 categories could be generated, such as 'money management', for before the parent's death. For after the parent's death, 7 categories could be generated, including 'money matters'.

研究分野：社会福祉学

キーワード：親亡き後支援 知的障害者 当事者参加型調査

1. 研究開始当初の背景

知的障害のある人の親亡き後については、生活の場の保証として入所施設の整備を中心に対応が図られてきた。しかし、昨今の障害者福祉においては、知的障害のある人の生活の場を制約の多い入所施設からより制約の少ない地域社会に求める傾向にある。それにもかかわらず、親たちは親亡き後の知的障害のある人の生活の場を継続した生活が見込まれる入所施設に求める傾向にある。このことは、親たちが可能な限り自分たちで知的障害のある人の介護を担い、自分たちではどうしてもなくなった時に生活の場を入所施設に求めるという構造によって成り立っている。

このような状況の中で、知的障害のある人の親亡き後に関する研究は、その主たる介護の担い手である母親に対して、親亡き後の問題に対する母親自身の考えなどに関するインタビュー調査を中心として展開されてきている。また、関連した研究として、知的障害のある人の家族による支援に関する研究や親元からの自立に関する研究が、同じく母親に対するインタビュー調査を中心として展開されてきている。そしてこれらの研究の結果から、知的障害のある人の親亡き後の問題について、(1) 母親の抱え込み、(2) 母親への依存、(3) 母親の負担、(4) 適切な支援の不足、(5) 社会から求められる母親の役割、(6) 母親の孤立、(7) 母親の高齢化、(8) 母親の将来に対する不安、(9) 母親による代理決定、などに関する問題が指摘されている。

しかし、これらの研究の成果はいずれも知的障害のある人の母親の視点によるものであり、親亡き後の当事者である知的障害のある人自身の視点による研究は見られない。このようにこの研究テーマにおける問題点は当事者である知的障害のある人自身の視点が抜けているということだと言える。そこで、知的障害のある人の親亡き後に向けて、知的障害のある人自身が何を必要としているのか、あるいは、実際に親亡き後に直面した知的障害のある人にとって何が必要であったのかということについて、研究を通して明らかにすることが必要になると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、知的障害のある人の親亡き後に際して対応が必要となる事柄について、これから経験するあるいはすでに経験した知的障害のある人の目線から調査を通じて明らかにすることを目的とした。

その際、本研究における調査は参加型アクションリサーチの手法を用いて行うこととした。参加型アクションリサーチとは一連の調査プロセスに当事者が関わり、当事者の知見が活かされた調査が行われることを通じて調査にかかわる当事者がエンパワメントされていくという調査手法であり、社会福祉領域のみならず様々な研究領域において展開されている。この調査手法を用い、親亡き後の問題に直面している知的障害のある人が共同研究者となり、同じく親亡き後の問題に直面している知的障害のある人を調査対象者として、親亡き後に際して必要とされる支援についてインタビュー調査を通して明らかにすることとした。そしてそのことを通じて、親亡き後の問題に向き合うもの同士が親亡き後の問題点について検討し、その対処方法を明らかにすることとした。

3. 研究の方法

調査項目の設定

共同研究者である知的障害のある人に自らも関係する親亡き後の問題に関して調査すべき内容についてのアイデアを出してもらい、そのアイデアを基に調査項目を設定し、5項目からなるインタビューガイドを作成した。

調査対象者の選定

共同研究者である知的障害のある人の有するネットワークを活用して、調査対象者である知的障害のある人を選定した。

インタビュー調査

において抽出した調査対象者に対して共同研究者である知的障害のある人がインタビュー調査を実施した。その際、調査対象者に調査内容及び倫理的配慮に関する説明を説明書を用いて行い、調査協力への同意が得られるようであれば同意書を取り交わした上で調査を実施した。あわせて、調査への協力は随時撤回できる旨について説明した上で同意撤回書を渡した。所要時間は1人につき60分程とした。調査内容及び倫理的配慮の説明に際して用いる説明書及び調査協力に関して取り交わす同意書並びに調査の同意撤回に際して必要となる同意撤回書については調査対象者である知的障害のある人の障害特性を考慮して平易な表現を用い、あわせて漢字にはふりがなを振ることとした。

データ分析

インタビュー調査で得られたデータを基に質的分析を行った。その際、佐藤の質的データ分析法を参考にし、質的データの分析ソフトである MAXQDA を用いて分析を行った。なお、質的分析には調査データを得ながら分析を重ねるという特徴があるため、調査データの分析はインタビュー調査と並行して実施することとした。

4. 研究成果

親亡き後の問題にこれから直面する、あるいはすでに直面している知的障害のある人にインタビュー調査を行い、72名から回答を得ることができた。その上で、逐語録を作成し、佐藤の質的データ分析法を参考にして、質的データの分析ソフトである MAXQDA を用いた分析を行った。

その結果、親が亡くなる前に親亡き後に際して対応が必要とされることが想定されることについては、「お金の管理」など13のカテゴリーを生成することができた。また、親が亡くなった後に親亡き後に際して対応が必要となったことについては、「お金のこと」など7つのカテゴリーを生成することができた。

そしてこれらの成果を基に、親亡き後の問題にこれから直面する知的障害のある人のために、必要となる支援要素をまとめたノートを作成し、知的障害のある人とその親からなる全国組織である全国手をつなぐ育成会連合会を通して全国の知的障害のある人およびその親に対してデータの配布を行った。また、このノートの使い方に関するワークショップを、2024年1月に行われた第8回全国手をつなぐ育成会連合会全国大会愛媛大会のすまいる大会(本人大会)において、知的障害のある人の協力を得て行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本科研の成果物である知的障害のある人の親亡き後の支援ために作成したノートの使い方に関するワークショップを、2024年1月に行われた第8回全国手をつなぐ育成会連合会全国大会愛媛大会のすまいる大会（本人大会）において、知的障害のある人の協力を得て行った。なお、本研究における一連の取り組みについては全国手をつなぐ育成会連合会機関紙である手をつなぐの7月号において発表することになっている。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	望月 隆之 (Mochizuki Takayuki) (00791708)	聖学院大学・福祉心理学部・准教授 (32412)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協 力 者	奈良崎 真弓 (Narasaki Mayumi)	本人会サンフラワー会	
研究 協 力 者	篠原 力 (Shinohara Tsutomu)	本人会サンフラワー会	
研究 協 力 者	角田 辰雄 (Kakuta Tatsuo)	本人会サンフラワー会	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------